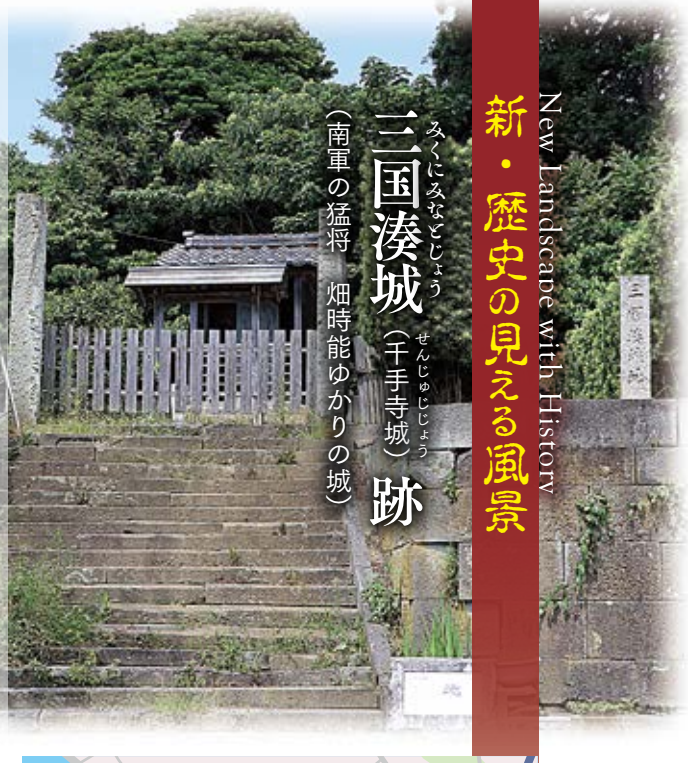
New Landscape with History

新・歴史の見える風景



三国湊城（千手寺城）跡

（南軍の猛将　畑時能ゆかりの城）

畑時能は武蔵の生まれで、新田義貞・脇屋義助兄弟に従い各地を転戦し、南北朝期、義貞の越前入りにも同行、越前守護の足利（斯波）高経率いる北軍と戦闘を繰り広げた。

１３３８年（建武５年）閏７月に灯明寺畷での義貞の敗死によって、南軍（新田軍）はパニック状態となり、一夜にしてその軍勢は雲散霧消に陥った。それでも、義貞の弟で副将でもある脇屋義助は残った兵をまとめ、南の府中（武生）に退いた。

畑時能は、越後から駆け付けた援軍とともに北に退き、越後兵の越前からの撤兵を見送った後、三国の湊城を根拠に北軍に抵抗し、反撃の機会を待っていた。

湊城は、別に千手寺城とも呼ばれており、泰澄大師開基の天台宗寺院千手寺の支坊を利用した城郭と考えられ、現坂井市三国の山王２丁目の妙海寺西墓地付近とされている。『太平記』には方２町（２２０ｍ四方）と記されており、大手は西側にあり、堀と塀で囲まれていた。

敗走から１年後の７月、畑時能は脇屋義助と連携し、一大攻勢に出る。三国湊城から出撃し、金津など坂井郡の北軍諸城を攻め落とした。脇屋軍も府中を出て、各地の北軍の城を落としつつ、九頭竜川と日野川の合流地点にある守護斯波高経の居城黒丸城（現福井市黒丸町）を包囲した。

ここに至って斯波高経は不利を悟り、一旦加賀に逃れた。

しかし、南軍優位は短命に終わる。黒丸城落城を知った幕府が越前に援軍を送ると、２ヶ月後には北軍は猛反撃を開始。次々と南軍の拠点を攻撃、暦応３年８月、畑時能の守る三国湊城も落城に追い込まれた。北軍が堀を渡り塀を越えて勇戦した記録が残っている。その後、時能は一旦降参するも、南軍が壊滅状態の中で再起し、鷹巣城に立て籠もる。そこでも斯波高経ら北軍に何重にも取り囲まれ、絶望的な戦いを強いられた。

暦応４年10月、最後の時が近づいたことを悟った時能は、わずかな手勢を二分し、一部は守備に残し、自らは残りの兵と供に大野方面に向かった。すでに脇屋義助が美濃に逃れており、合流を目指したのであろう。しかし斯波軍に追跡され、途中の伊知地山（現勝山市）に立て籠もらざるをえなくなる。時能はここで最後の戦いを挑み、一矢報いるものの傷ついて悶死し、時を同じくして鷹巣城も孤立したまま落城した。

時能終焉の地、伊知地山の麓に、「畑ヶ塚」の碑が建てられている。

その年の初冬には、越前の南軍は守護斯波氏（北軍）の手によって一掃された。

（文　奥山秀範）

解説案内板（明治期には郡役所などが置かれた）

三国湊城趾碑（妙海寺西墓地）

跡地に建立されている妙海寺

後背の高台一帯、左の坂を少し下ると城趾碑がある